

分野： I 小児・成人ぜん息に関する調査研究
① 高齢ぜん息患者の状況に応じた自己管理手法

I-①

委託業務名：高齢者ぜん息の状況に応じた自己管理手法

調査研究代表者氏名：鈴川 真穂

1 評価項目						
5点:大変優れている(A判定) 4点:優れている(B判定) 3点:普通(C判定) 2点:やや劣っている(D判定) 1点:劣っている(E判定)						
	5点	4点	3点	2点	1点	平均点
(2) 研究成果目標の達成度	1人	3人	1人	0人	0人	4.00
(3) 研究計画の妥当性	2人	2人	1人	0人	0人	4.20
個別評価(第3評価):(2)(3)の平均						4.10
(6) 総合評価(第2評価)	2人	3人	0人	0人	0人	4.40
全体評価(第1評価):(2)(3)(6)の平均						4.20

2 記述評価
・本介入試験がどの年齢層まで使用でき、自己管理に有用なものになるか期待される。 ・症例数を他施設から集めることは大変だと思いますが、全国からの142例については、地域差に関する配慮、地域ごとの年齢分布などの情報も知りたいところです。フレイルという言葉については、評価としてフレイルの程度(重症度?)を意識した解析があるといいと思います。 ・前期高齢者と後期高齢者の2群間の比較データが多く報告されたが、その2群間の比較から何を言わんとするのか不明。どうすれば高齢者喘息の加齢変化や高齢化に伴う喘息によるQOLの低下を防ぐことができるのか、どのような介入で症状が改善するのかが見えてこない。 ・フレイル患者ほど喘息症状が重いというデータは興味深いですが、その状態を改善するには何をすべきかの検討が必要である。 ・それなりに、順調にすすみ、本事業に貢献できる調査研究と評価します。 ・フレイルの人ほど、ぜん息症状が強いとのことですが、ぜん息症状の強さから、フレイルや生活機能をみることも、予防や対応の面から重要と考えます。 ・フレイル、認知機能、ADLについて、ぜん息の人と非ぜん息の人との比較についての検討はどうですか。 ・高齢者ぜん息患者の身体活動性に関するデータはユニークであり、新規性がある。ほぼ順調に研究が進められている。 ・症例のさらなる追加が必要と考えられるが、ほぼ計画にしたがって研究が進められている。 成果発表会で示された解析結果は各因子単独の年齢群比較となっており、因子間の相互関連性を考慮した解析が今後必要と考える。